

## 「偽りの家」

マルコの福音書 14:53~69

### はじめに

イエシュアはイスカリオテ・ユダの裏切りによって捕らえられ、大祭司の家へと連行されます。大祭司と言ってもこの時の大祭司カヤパは、当時の支配国であったローマの総督によって任命された、いわば偽りの、偽物の大祭司ですが。すでに弟子たちはみなイエシュアを見捨て、逃げて行ってしまいました。しかしペテロだけがこっそりと後について来たことによって起こる出来事が今日の箇所です。捕らわれてもなお、毅然としたイエシュアの態度とそれに対するユダヤ人たちの憎悪、そして弟子であるはずのペテロが見せる、信じられないような言動。物語として読むだけでも非常にドラマチックで興味深い箇所ですが、ここにもやはり神のご計画が表されています。今日もそれをご一緒に見てまいりましょう。

### 1. イエシュアとペテロ

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:53 人々がイエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長たち、長老たち、律法学者たちがみな集まって来た。

14:54 ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の庭の中にまで入って行った。そして、下役たちと一緒に座って、火に当たっていた。

イエシュアとペテロについての描写が「大祭司の家」という同じ場所において異なる二つの場面、状況を表しています。イエシュアはその家の中に入り、そこに当時のイスラエル、ユダヤ人を代表する者たちが「みな集まって来」ています。もちろんそれはイエシュアを断罪し、殺すためのものなのですが、不思議なことにこの状況は、神のご計画の完成の姿を見事に表しています。なぜならイエシュアとイスラエルが一つの家、一つの国にともに入ると、集まる、住むようになることこそが神のご計画のそれだからです。一方ペテロはそこから「遠く」離れ、「火に当たっていた」とあります。「火」を意味するウール(אור)は本来、「死ぬ、死の地」(創世記 11:28)を意味する言葉で、また「当たっていた」と訳されているハーマム(חמם)は本来、「高熱によって溶け去る」(出エジプト記 16:21)という意味なのです。イエシュアとペテロについてのこの二つの描写は、対照的な状況を表しているのですが、神のご計画がどのようにして完成、成就するのかということが表されており、それは以下の預言にある通りです。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

13:1 その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。

13:8 全地はこうなる——【主】のことば——。その三分の二は断たれ、死に絶え、三分の一がそこに残る。

13:9 わたしはその三分の一を火の中に入れ、銀を錬るように彼らを錬り、金を試すように彼らを試す。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『これはわたしの民』と言い、彼らは『【主】は私の神』と言う。』

金や銀を火によって精錬し、不純物を取り除いてこれを純化させるように、「ダビデの家とエルサレムの住民」イスラエルの民に大きな患難の中を通らせ、その残りの民を神に立ち返らせ、御国の民とする。これが神のご計画の内容です。旧約聖書を見ますと、イスラエルが神に背き、その結果大きな危機に直面し、その苦しみの中で彼らは神に叫び求め、神が彼らを助け出される、という出来事が満載です。彼らの歴史はこの繰り返しと言っても過言ではありません。しかしこれらの事実もまた「型」であり、やがて終わりの時代に獣と呼ばれる反キリスト、偽メシアが現れ、正真正銘の苦難がイスラエルに襲いかかります。そして何度も聖書に記されているように、その時も彼らは神に叫び求めることでしょう。しかし、この時に彼らを救い出すのは、これまでのような人間の預言者や王、さばきつかさなどではなく、正真正銘の救い主である神の御子メシアなるイエシュアです。このように、大祭司の家におけるイエシュアとペテロについての描写には、終わりの日においての神のご計画の成就が表されているのです。

## 2. 偽証

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:55 さて、祭司長たちと最高法院全体は、イエスを死刑にするため、彼に不利な証言を得ようとしたが、何も見つからなかった。

14:56 多くの者たちがイエスに不利な偽証をしたが、それらの証言が一致しなかったのである。

14:57 すると、何人かが立ち上がり、こう言って、イエスに不利な偽証をした。

14:58 「『わたしは人の手で造られたこの神殿を壊し、人の手で造られたのではない別の神殿を三日で建てる』とこの人が言うのを、私たちは聞きました。」

14:59 しかし、この点でも、証言は一致しなかった。

イエシュアの前に出される数々の「偽証」とそして「一致しなかった」というこの様子は、13章でイエシュアが語られた「終わりに近づくときのしるし」を再度指し示したものです。

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:6 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそ、その者だ』と言って、多くの人を惑わします。

13:7 また、戦争や戦争のうわさを聞いても、うろたえてはいけません。そういうことは必ず起こりますが、まだ終わりではありません。

13:8 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで地震があり、飢饉も起こるからです。これらのことは産みの苦しみの始まりです。

13:9 あなたがたは用心していなさい。人々はあなたがたを地方法院に引き渡します。あなたがたは、会堂で打ちたたかれ、わたしのために、総督たちや王たちの前に立たされます。そのようにして彼らに証しするのです。

このようにイエシュアについての数々の「偽証」およびそれを語る者は、イエシュアの「名を名乗る者」すなわち偽メシア、反キリスト、偽預言者たちの「型」です。そして「祭司長たちと最高法院全体」が「一致しなかった」という状況は「戦争」「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり」という預言を指し示しています。そしてこの時まさに「人々はあなたがたを地方法院に引き渡します。あなたがたは、会堂で

打ちたたかれ、わたしのために、総督たちや王たちの前に立たされます」という状況がイエシュアの前に実際に展開しているのです。このように、13章でイエシュアが語られた預言が、ここでは「型」として示され、再度強調されているのです。

ここでくれぐれも注意していただきたいことがあります。この世の「終わりに近づくとき」に現れる反キリスト、また偽預言者とは、イエシュアなどいない、神などいないと言って、その存在を否定する者、聖書を否定する者のことではありません。イエシュアについて、神についての誤った情報、偽った聖書預言、正しくない聖書解釈を語る、発信する者のことです。ここでのユダヤ人たちのように「わたしは人の手で造られたこの神殿を壊し、人の手で造られたのではない別の神殿を三日で建てる」というイエシュアの御言葉を巧みに利用し、その上で偽りを言うのです。荒野でサタンがイエシュアを誘惑した出来事を思い出してください。サタンは確かに聖書を利用するのです。ですから聖書について、イエシュアについて多少の知識がある、何となく分かっているというような程度ではこれに対抗すること、つまりその真偽を見分けることができません。ですから神について、イエシュアについて、私たちは聖書を学び続ける必要があるのです。

そしてこの事実を前に、本当に私は主にすが、祈らされる思いです。なぜならここでのユダヤ人たちのように、私たち牧師もまたイエシュアについて、聖書の誤った解釈という「偽証」をする者となり得るからです。聖書を巧みに利用して偽りを言う可能性が最も高いのは、このように何度も教会で聖書を語り、これを教える者たちです。この箇所を学びながら本当に心を探られるような思いがしました。皆さんどうか、ぜひこれからも私の聖書解釈、礼拝メッセージのために、聖霊の助けと導きがあるようにと祈ってください。よろしくお願いいたします。

### 3. 証し

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:60 そこで、大祭司が立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか。この人たちがおまえに不利な証言をしているが、どういうことか。」

14:61 しかし、イエスは黙ったまま、何もお答えにならなかった。大祭司は再びイエスに尋ねた。「おまえは、ほむべき方の子キリストなのか。」

14:62 そこでイエスは言われた。「わたしが、それです。あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」

教会ではよく「証し」をすると行って自分の身の回りに起こったことを互いに話すことがありますが、それらはすべて「型」であり、真の証しとは、ここでイエシュアが語られた御言葉だけです。すなわちイエシュアは神の御子メシア（キリスト）であるということ、そして「あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見る」ということです。ここには二つの出来事を「見る」ことが指し示されています。それはまずイエシュアが「力ある方の右の座に着く」ことを「見る」者です。この光景は、地上で見えるものではありません。ステパノという人が地上でこれを見ましたが、その直後に彼は引き上げられました（使徒の働き 7:55~59）。天に引き上げられる者、携挙される者だけがこの光景を見ることができます。ですから私たち教会は、これを証しする者となるのです。そして「天の雲とも

「来るのを見る」者、これは逆に地上からでなければ見ることはできません。大患難を生き残ったイスラエルの民がこれを見る、すなわちイエシュアの地上再臨です。これこそが、これだけが「証し」であるということ、イエシュアはここでこの御言葉、この出来事についてのこの他は「黙ったまま、何もお答えにならなかった」ということをぜひ覚えてください。

#### 4. 衣を引き裂く

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:63 すると、大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。「なぜこれ以上、証人が必要か。」

14:64 あなたがたは、神を冒瀆することばを聞いたのだ。どう考えるか。」すると彼らは全員で、イエスは死に値すると決めた。

14:65 そして、ある者たちはイエスに唾をかけ、顔に目隠しをして拳で殴り、「当ててみる」と言い始めた。また、下役たちはイエスを平手で打った。

イエシュアの証しを聞いた大祭司は「衣を引き裂い」たとあります。この行為は当時のユダヤ人たちの激しい怒り、または悲しみを表すものでしたが、聖書で最初にこれを行ったのは意外な人物です。

創世記【新改訳 2017】

37:29 さて、ルベンが穴のところに帰って来ると、なんと、ヨセフは穴の中にいなかった。ルベンは自分の衣を引き裂き、

37:30 兄弟たちのところに戻って来て言った。「あの子がいない。ああ私は、私は、どこへ行けばよいのか。」

聖書で最初に「衣を引き裂い」た人物、それはアブラハムの子イサクの子ヤコブの長子ルベンです。彼は弟のヨセフがいなくなったことに対してこのように行ったのです。そして彼は「あの子がいない。ああ私は、私は、どこへ行けばよいのか」と、まるで道を見失い、さまよう迷子のように語っています。これはまさしくイスラエルの民、ユダヤ人たちの歩みを指し示しています。彼らは「あの子」すなわち神の御子メシアであるイエシュアを見失い、見誤り、まさに世界をさまよう流浪の民、離散の民となったのです。今日イスラエルは国家として復興し、ユダヤ人たちは続々とその地に帰還を果たしていますが、やがて現れる獣、反キリストによって再び彼らは国を追われることとなります。「大祭司は自分の衣を引き裂い」たというこの出来事は、究極的にはその事実を指し示しており、まさに大祭司をはじめとする祭司たち、礼拝者たちが神殿を追い出され、逃げまどい、まさに「ああ私は、私は、どこへ行けばよいのか」と、さまよい歩くようになることが指し示されているのです。そしてここではユダヤ人たちがイエシュアに対して凄惨ないじめ、虐待を行っていますが、やがて彼ら自身が、彼らの子孫がこれと同じ目に、それ以上の目にあうことがここには表されているのです。イエシュアがこう言われているとおりです。

ルカの福音書【新改訳 2017】

23:28 イエスは彼女たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい。」

23:29 なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来るのですから。

23:30 そのとき、人々は山々に向かって『私たちの上に崩れ落ちよ』と言い、丘に向かって『私たちをおおえ』と言い始めます。

23:31 生木（イエシュア）にこのようなことが行われるなら、枯れ木（イスラエル）には、いったい何が起こるでしょうか。」

ではイスラエルには「いったい何が起こるでしょうか」。より詳しい事実が次に表されていきます。

## 5. ペテロの否定

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:66 ペテロが下の中庭にいますと、大祭司の召使いの女の一人がやって来た。

14:67 ペテロが火に当たっているのを見かけると、彼をじっと見つめて言った。「あなたも、ナザレ人イエスと一緒にいましたね。」

14:68 ペテロはそれを否定して、「何を言っているのか分からない。理解できない」と言って、前庭の方に出て行った。すると鶏が鳴いた。

14:69 召使いの女はペテロを見て、そばに立っていた人たちに再び言い始めた。「この人はあの人たちの仲間です。」

14:70 すると、ペテロは再び否定した。しばらくすると、そばに立っていた人たちが、またペテロに言った。「確かに、あなたはあの人たちの仲間だ。ガリラヤ人だから。」

14:71 するとペテロは、嘘ならのろわれてもよいと誓い始め、「私は、あなたがたが話しているその人を知らない」と言った。

14:72 するとすぐに、鶏がもう一度鳴いた。ペテロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と、イエスが自分に話されたことを思い出した。そして彼は泣き崩れた。

この出来事は言葉で述べるよりも表にした方がイスラエルに対する神のご計画の「型」が理解しやすいと思いますが、鍵となる表現のみ説明しますと、まず「鶏が鳴いた」という表現は、マルコの福音書 13:35 のイエシュアのたとえ話から、イエシュアが地上に来られること、またマタイの福音書 23:37、ルカの福音書 13:34 から、イエシュアがイスラエルの民を呼び集めようとすることを表しています。

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:35 ですから、目を覚ましていなさい。家の主人がいつ帰って来るのか、夕方なのか、夜中なのか、鶏の鳴くころなのか、明け方なのか、分からないからです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

23:37 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度も、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

そしてイエシュアを「知らない」と言ったペテロの三度の「否定」は、エルサレムの神殿の否定、その崩壊の事実を表しています。たしかにイエシュアはこの神殿を指し、「わたしの家(マルコの福音書 11:17)」と呼んでおられるからです。以上の事実を踏まえて、この箇所におけるペテロについての描写を見ますと、以下のような神のご計画が表されていることがわかります。

	ペテロについての描写	イスラエルに対する神のご計画
①	14:68 最初の否定	➡ バビロンによる第一神殿の崩壊
②	14:68 鶏が鳴く	➡ イエシュアの初臨
③	14:70 二度目の否定	➡ ローマによる第二神殿の崩壊
④	14:71 のろいを込めた三度目の否定	➡ 反キリストによる第三神殿の崩壊(背教、墮落)
⑤	14:72 再び鶏が鳴く	➡ イエシュアの再臨
⑥	14:72 ペテロが泣き崩れる	➡ イスラエルの民の回心

このようにここでのペテロについての描写には、イエシュアとそしてイスラエルの民の象徴である神殿についての歴史、およびこれから起こることすなわち神のご計画の流れが見事に表されているのです。そして最後にペテロが自分についてのイエシュアの御言葉を思い出し「泣き崩れ」る姿は、以下の預言を指し示しています。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

12:11 その日、エルサレムでの嘆きは、メギドの平地のハダド・リンモンのための嘆きのように大きくなる。

12:12 この地は、あの氏族もこの氏族もひとり嘆く。ダビデの家の氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。ナタンの子の氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。

12:13 レビの子の氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。シムイの子の氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。

12:14 残りのすべての氏族は、あの氏族もこの氏族もひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。

このように、終わりの日、「恵みと嘆願の霊」が注がれ、イスラエルの残りの者たちは「自分たちが突き刺した者」イエシュアを「仰ぎ見て」そして「激しく泣く」「嘆く」こととなります。そしてそれは以下の預言へとつながっていきます。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

13:1 その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。

13:2 その日——万軍の【主】のことば——わたしはもろもろの偶像の名を、この地から絶ち滅ぼす。それらの名はもう覚えられない。わたしはまた、その預言者たちと汚れの霊をこの国から除く。

再臨のイエシュアによってイスラエルの民は罪を赦され、イエシュアの民、神の民となり、これに敵対したすべてのものは滅ぼされます。このようにしてイエシュアはイスラエルを再建し、ついにこの地上に神の国が建てられるのです。

## 6. 信じる

今日の箇所は本当に偽りだらけ、嘘、誤り、信じられないことばかりが目につく出来事でした。偽物の大祭司の家で、多くの偽証がなされ、正しい証しが否定され、罪のない人に死刑の判決が下され、親しい人を「知らない」と嘘をついて裏切る、まさにこの世の闇を表すかのような箇所です。しかしそのような状況だからこそイエシュアの存在とその御言葉が輝いていました。イエスはキリスト、すなわちイエシュアはメシアであるということ、それはつまりイエシュアは携挙と再臨によって、神のご計画の完成である、神の国を建てられる御方であるということ、イエシュアご自身によるこの証言が、今日の箇所では一層輝いて見えました。この世の闇をもたらすサタンは、人々の目からこのイエシュアによる携挙と再臨の事実を引き離そうと、この世の快樂や問題や苦しみに目を向けさせようと必死です。さらには聖書を用いて真実を捻じ曲げ、偽りの解釈によってこれを否定、あるいは混乱させようと必死です。しかしサタンが何をしようと何を言おうと、また人がどう考え、どう思おうとイエシュアは神の御子メシアです。そしてイエシュアは私たち教会を携挙し、ついにはこの地上に再臨されます。これを阻むことは誰にもできません。この世が、今の私たちの人生が、生活がどうなろうとこの事実は絶対に変わりません。イエシュアを信じる、神を信じるとは、私たちの思い、考え、人生のど真ん中にこの事実を置くことだと私は信じます。これに同意しアーメンと言う人の上に、聖霊の助けと守りがありますように。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

14:1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。